

令和4年度 第2回 総合教育会議 会議録（要約）

期 日 令和5年2月2日（木） 10時00分から11時32分

場 所 雲仙市 吾妻町ふるさと会館 研修室1

出 席 者 市長
金澤秀三郎市長
教育委員会
下田和章教育長
仁禮智加子委員、永岡悦子委員、江川儀平委員

欠 席 者 教育委員会 駒田義弘教育長職務代理者

事 務 局 市長部局
大津総務部長、佐々野政策企画課長
教育委員会事務局
富永教育次長、林田総務課長、中村学校教育課長
内田生涯学習課長、加藤スポーツ振興課長、田中学校教育課指導主事
森田総務課課長補佐（記録）

会議日程

- 1 開会
- 2 市長挨拶
- 3 議事
中学校部活動の地域移行について
- 4 その他
- 5 閉会

【10:00開会】

1 開会

2 市長あいさつ

金澤市長 公立中学校における部活動の地域移行については、現在、国において準備が進められており、本市においても、モデルケースとして、県内初となる吹奏楽部の地域クラブである雲仙ジュニアブラスが設立され、活動を行っているところである。

本日は、直近の国の動きや、雲仙ジュニアブラスの活動状況、生徒や保護者等へのアンケート調査の結果などをもとに、部活動の地域移行について、委員の皆様の考えや思いを発言いただき、意見交換ができればと考えている。

3 議事事項

市長の指名により富永教育次長が議事進行を行う。

議事 中学校部活動の地域移行について

※事務局から、中学校部活動の地域移行について説明。

富永教育次長 各委員から意見をいただきたいが、まず、今の説明について質問はあるか。

仁禮委員 まず、中学校の部活動の状況の表を見て、数字が偏っていてびっくりした。

千々石中学校のバレー部の女子が2人しかいないので日頃どのような部活の練習されてるのかと思った。

他の学校と合同でしているとか、バレー部以外にも何か分かっていたら教えてほしい。

田中指導主事 千々石中ほか、部員が少ないところは、大きく二つ方法があって、一つは校内でほかの部とか、部活動に入っていない生徒に協力を仰ぎ、市の中総体に出場するという形。千々石中学校の女子バレー部は、6月の市の中総体の時には、そういう形をとって、校内の生徒に協力をしてもらい、6名募って出場をした。

もう一つは、合同チームでの参加というやり方がある。現在特に新人大会においては、3年生が引退してから、1、2年生のみになるので、市内の競技では、男子バレーで、南串中学校と瑞穂中学校が組んで市の予選に出場をした。

それから軟式野球では、南串中学校と小浜中学校が合同チームを組んで出場、それから、

千々石中学校と吾妻中学校の軟式野球部が、同じく合同チームを組んで、市の大会とか、各種大会にも出場する形をとっている。

そのような形で、合同チームをとったり、単独だけでも、よその学校と一緒に練習等にも参加をしたりとかいうような形で、何とか運営をしているところが実情。

金澤市長 この青の資料の２枚目のスポーツも文化も一緒だと思うが、スポーツのほうがここに書いてある、総合型地域スポーツクラブというのに該当する雲仙市の団体が在るのかを教えてほしい。

加藤スポーツ振興課長 雲仙市の総合型地域スポーツクラブは、がまだスポーツクラブ１団体がある。数は１６０人ぐらいの構成で、バレーボールが主の団体となっている。バレーボールのほかは、ソフトテニス等の活動がされている。

金澤市長 このメリットというところに書いてある公認スポーツ指導者資格というのが、よく分からないので中身を教えてほしい。

加藤スポーツ振興課長 公認スポーツ資格というのは各競技における指導者のライセンスのことである。

１番進んでいるのはサッカー関係で、サッカーは指導ライセンスを持っていないと大会に出られない、ベンチには入れないとかいうふうになっている。

バスケットボールについても近年は、ライセンスの取得が推進されており、今現在は、九州大会は指導ライセンスを持たないと入れないとか、全体的に指導ライセンスを取るというようなことで進められている。

金澤市長 これはどこが認定するのか。

加藤スポーツ振興課長 日本バスケットボール協会、サッカーであれば日本サッカー協会が発行するような形になっている。

金澤市長 こういう指導者資格を有している方が、実際雲仙市にどのぐらいおられるというのは分かるのか。

加藤スポーツ振興課長 バスケットで公認審判員を持つてゐる後輩に尋ねたところ、以前と比べたら、かなりの所持状況であると、数字までは言えないが、かなり取る方向で進んでる。

富永教育次長 例えば、バレーボール協会で、指導者がいないと大会に出れないとか、そう

いったことはあるのか。

田中指導主事 中学校しか分らないが、バレーボール競技は、指導者、学校の先生や外部指導者等がベンチに必ず入らなければいけないというようになっている。

大会によっては、保護者でも可という場合もある。

ただ、バスケットボールに関しては、必ず審判員が必要で、居ない場合には、協会にお願いをする形で、大会に臨むという形をとっている。

江川委員 総合型地域スポーツクラブ。今、話が合った、がまだスポーツクラブというのが、既存であるということだが、その指導者の中に、学校の職員が何らかの形で関わっているのかが1点。あと、保護者の、送迎とか、経済的な負担とか、そういったものも少しはあるのかどうかをお尋ねしたい。

加藤スポーツ振興課長 まず、総合型の質問だが、がまだスポーツクラブについては、現在約160人が入っている。

中心となっている方は、教職員のOBの方々が多く構成されているような状況。

事務局にお尋ねしたが、高齢化が進んでいて、その理由が、教職員のOBの方々の、構成が主であり、あと市役所職員OBとかも入っている状況である。

江川委員 保護者の経済的負担もある程度発生してるのか。

加藤スポーツ振興課長 総合型については、基本的に多種目、多世代のスポーツクラブということで申し上げたが、世代の幅が、ご年配の方の幅になっているような状況である。

その中で、いろんな子どもたちの事業も若干されているようだが、地域全体に呼びかけて、親御さんの送迎という形になっていると思う。

下田教育長 文化省やスポーツ庁や文化庁が挙げた総合型地域スポーツクラブというのは、主体を子どもにおいた総合クラブを想定している。

ところが、雲仙市にある、がまだクラブの場合、退職された方たち、年配の方たちが御自分たちの運動を楽しみながらやるということで、ここで例を出してある、総合型地域スポーツクラブとは趣旨が若干違う。

本市が今後こういうスポーツクラブを新たに立ち上げていくときには、主体はあくまでも子どもたちなのだが、そこに大人の方の同じスポーツをされる方も一緒に入って協力していただく、そういうことをイメージしているというふうに捉えていただければと思う。

それから、保護者の負担ということでは、合同チームで参加をしている、合同練習のときに、保護者が送迎することでの負担があるという事で、保護者が送れない子どもについては、チ

ヨイソコうんぜんを利用して、移動している子どもたちも実際いる。

永岡委員 雲仙ジュニアブラスは、市内5校と書いてあるが、その5校がどこなのか。あと、それに携わってた人たちのアンケートを見るとすごく子どもたちの成長が大きかったこととか、それを見守る保護者の方の喜びが感じられるとか、少人数では味わえない経験も有ると言う事だが、これに参加出来ない子どもたちの中で、参加したいという声は上がっているのか。

中村学校教育課長 雲仙ジュニアブラスの活動状況だが、7校中5校からの加入ということで、この代表の方から千々石中と瑞穂中からは加入が無い状況と聞いた。活動場所だが、主に使われてるのは千々石中の体育館と聞いている。

土、日の練習については、各中学校の部活動がまだ継続している状況。

ただ、今回は、モデル事業ということで、立ち上げた。ブラスアルファで立ち上げているので、加入した子どもは二つ。

他の子どもたちが、このブラスの方へ入りたいがなかなか家庭の都合でとか、そういう家庭もあるだろうと想定はしているが、その詳細なことについては未だ把握は出来ていない。

富永教育次長 ほかに質問はあるか。意見でも結構。

ジュニアブラスの話があったが、例えば、楽器の輸送、部員の移動、楽器を主に活動してる千々石中学校の事務室に置いている状況である。

例えば、ジュニアブラスのことがあったが、今現在、それぞれの学校での部活には、それぞれの吹奏楽部に入りながらジュニアブラスに入っているの、それぞれの学校で部費を払いながら、またジュニアブラスでは、3,000円くらいの加入金と、各月の部費の負担だから、保護者にとっては二重の負担を今現在しているという状況で、経済的にも負担、それから、例えば千々石中学校まで送迎をしなければならない負担というようなことが、生じているのではないかと思ってるところだが、その点で何か皆さん方御意見あるか。

仁禮委員 月3,000円の入会金という話があったが、その使い道を教えてほしい。謝金という考えはある。

下田教育長 たしか入会金が3,000円で、毎月1,000円を徴収している。そのお金については、今言われた、指導をされている方への謝金、これも1日、時間に関係なく1,000円。

仁禮委員 大金だ。

下田教育長 主にそういうふうに使われている。

文化部の雲仙ジュニアブラスを実験的にやっているけれど、来年からこれを運動クラブの方にも広げて行く。

そのことを考えたときに、教職員の時間外の勤務が非常に多いので、この負担軽減よりも、子どもの数が激減したということで、子どもが望んだ部活動が出来ない。

だからそこを何とかしないといけないということで、国が進めてきているが、中学校の部活動を地域に移行することについて、考えをお聞かせいただきたい。

仁禮委員 子どもの中学校の部活動の指導者が本当にいなくて、名前だけ貸してもらって大会のときだけ座ってもらうような感じで、日頃の部活動の指導は全くなし、顧問の先生も経験者じゃないので部活の終わり頃にちょっと顔を出すような感じの部活だった。

そういう地域の指導者が本当にいらっしゃったらいいなと思う。

もし見つからなくても、その近隣の学校に移動してそこで専門的な指導を受けられる環境をつくっていただくと、本当に子どもたちも幸せになるだろうと思う。

永岡委員 私は陸上のことしか分からないが、子どもたちがすごく指導者に恵まれていて、先生方も陸上の先生がちゃんといらしたし、地域の方も、卒業した若い子たちが、指導に来てくれていたので、子どもたちは、本当にメキメキ上達した。

活動を地域に移行するっていうことはすごく大切なことかなと、子どもたちも少ないし、上手な子とか、出来なくても努力している子どもたちを多く見ることができるので、私は地域のほうに移行するということには賛成だ。

江川委員 私も基本的には、この地域移行については賛成だというふうに考えている。

雲仙市内でそういう受入れ体制をどうしていくのか。あるいは指導者の場合も絡んでくる。保護者の負担。そういった課題をどうクリアして行くかと言った事が、やはりこれからの大きな課題になってくるだろうと思う。

令和8年度からの休日の実施に向けて、その辺のところは、整備していかないと、平日の実施までは本当に遠い道のりかなというふうに思う。

金澤市長 国の意向として教職員の負担軽減とか、子どもの数が減少するので、将来に渡っては、全て地域に移行をしたいというのが国の基本的な考え方なわけで、何か特定の一つの、クラブを平日も休日も全部地域移行型に移行した時に、どんな問題が上がってくるかというのをしないと本当のところが見えてこないのじゃないかというような、心配がある。平日と休日を分けて、休日だけ地域移行で実証実験やっても、率直に言って、どうするのかなど感じる。

下田教育長 このゴールというところは、国も学校での部活動じゃなくて、全て地域に動かしていこうということなのだが、現実的な問題として、雲仙市が抱える広範囲の地理的な状況であるとかを考えれば現実的じゃないのだろう。

一つの方法としては、既に外部指導の方が、雲仙市も50何名の方が、平日から指導している。それが一つの地域移行になっている。

子どもの人数が少なくなって、一つの学校で成立をしないから、ここが切実な問題になってきているというところがある。

やはりどこを見て、この移行を進めていくか、地域の特性をもっともっと生かしていかなきゃいけないのだろうし全ての個人平等に、大事にしていけないといけないのだろう。

そこをやはり忘れない様にしなければいけないと私は思っている。

永岡委員 すごく大変だと思うのだが、子どもの中には、家の事情で、家の事情を言えない子ども、また、保護者の方でも、そのことを隠し通している方がいると思うが、平等にけるように、予算とか、そんなのも組んでほしいと思う。

下田教育長 今現在うちは部活動に対しての子どもたちの補助をしているのか。

中村学校教育課長 大きく三つある。まずは、部活動補助金、各中学校の部活動それぞれに加入している子どもの生徒の数であるとか、そういったものに対し、比例配分的に部活動で使えるお金を渡している。それから大会出場補助金、これは県大会以上、旅行宿泊費、または、交通機関の経費。それからもう一つが中体連の事務局への活動運営の補助金。これは部活動には行き渡らないが、中体連の事務局が運営をしたり、または中総体の大会を開催したりする。

富永教育次長 ちなみに中学校の部活動に対しては、約390万円程度の助成がある。

それともう一つ、中体連の運営等に関わる分については約1,350万円程度。

なので、1,700万円から1,800万円程度は、中学校の部活動に対する助成。

それは中体連の運営費も含めてだが、約1,300万円と、それから部活動に対しては約300、7、80万円程度、負担をしているという事。

ちなみに、小学生のクラブ活動については50団体ぐらいあるが240万円程度助成をしている。

何かあるか。

加藤スポーツ振興課長 小学生のクラブ活動振興会については、令和4年度、233万6,000円の補助金を支出しているところである。

構成団体については、8競技、49団体、構成員が629名というところだ。

金澤市長 教育長が言われた、移動を伴う部活動というのが、やはり移動すると当然そこに時間と経費がかかるだろう。保護者負担も含めて。

それを踏まえた上で、では、どういう手だてがあるのかということになると、どういうふうに整理していけばというのが、もしあれば教えてほしい。

下田教育長 平成17年に雲仙市が合併して、18年から本年5月までで、中学生の数が750人減っている。

ところが、この11年間で無くなった中学校が北串中学校と雲仙中学校で、これを合わせても生徒数が50名もいないぐらいなのだが、非常に子どもの数がどんどん減っているが学校が減っていない。ここをもう一つ、こう行けないかなと思っている。

例えば、県内の大村とか諫早とか長崎、佐世保あたりの中学校というのは1校当たり約500名程度いないと、日常のいろんな活動や使用、部活動も含めて、何か制約を受けてしまうというものがあるので、先ほど市長がおっしゃられた何か手立てをとった時には、あとは中学校をどうにか再編をしていって、そこで、部活動が多様になるのだが、そこに外部の方に指導をお願いしながら、そういう地域移行型というのを、一つ予定としては考えられるのかなというふうに思う。

富永教育次長 根本的に難しいということであれば、中学校の再配置ということなのだろうが、再配置の前に、学校教育課長、中学校が小規模になったことによって何か、部活動以外の弊害というのは何かあるか。

中村学校教育課長 今教育長からお話があったように平成18年度は1,784名、それがもう1,000人ぐらいまで減ってきている。

中学校の部活動の子どもの部員数が減ったというのものもあるが、学級数が減ることによって、教職員の数の定数が減っていく。

中学校は、教科数が小学校よりも多い。5教科プラス、あと美術、技術いろいろある。

そういったところへの教職員の配置がなかなか足りない状況で、やはり免外という言い方をするが、免許外で指導をさせたり、または幾つかの学校を兼務させて、美術の先生が授業のときだけ美術を教えに行く。

当然、教員の数が増えれば、その競技の専門性を持った教員もいるのではないかということ、やはりこの学級数の減というのが、子どもたちの教育活動に、大きな影響を与えているというふうに認識している。

富永教育次長 学級数の減ということなのだが、例えば国、英、理、数とかあって、何学級ぐらいあれば、十分なというか、一定程度の教科の担任は、免外が解消できるとかがあ

か。

中村学校教育課長 1週間に行う授業数。例えば美術は週に2時間はない。

でも、英語とか数学は多い。やはり、最低でも3クラス、または4クラス、各学年。

今の国見中がおおむねそれに当たってくるのだが、その辺りの規模があれば、教科も複数教職員を入れることができるという規模になっていく。

金澤市長 スポーツ庁長官が、長崎県の視察にお見えになった。

例えば県下で、いろんな部活動で、問題が多いというふうなことを聞かけると、「それは十分分かってるけれども、もうそういうことは言っておられない。」「これは断じてやるんだ。」みたいな発言が片一方であって、片一方では令和8年度以降にやるって言ってた期限を1回撤廃している。

スポーツ庁と文科省というかそういうところの流れが違う。今後、どういうふうに受け止めていたらいいいのかというのが何かあれば、ちょっと聞かせてもらいたい。

中村学校教育課長 今市長が言われたように、スポーツ庁の長官が、県のほうを視察をされて、長与町が先んじて来年度から本格的に地域移行するということで宣言をして、県内で見れば、長与町はスポーツの地域移行の先進地区、雲仙市はモデル事業を受けておりまして、県下で見れば、文化庁関係のモデル事業の推進地域ということになっている。

まず私たちが解消すべきは、部員数が少ないということを解消していく。

部活を減らす。でもそうなったら、道を閉ざす事になる。

そうなってくると、常時行動ができるような体制を整えていく。

そのための足の確保といったところが、雲仙市が今後優先的に行っていくべき課題であると。取り組む最優先事項であると。

そこを、次年度以降、どういう組合せでどういう競技に絞って、というところを少しずつ取り組んでいき、少なくとも一斉にというのは、雲仙市は難しいのではないかというふうに認識している。

下田教育長 スポーツ庁と文科省も少しここ温度差があるのかなと思う。

やはりスポーツ庁というのは、競技力向上なのだと思う。

欧米型のこういう地域型のスポーツクラブというのは、もう既にずっと昔からドイツであってアメリカであって、競技とその下部組織が広がっていく中で、競技力を上げてきた。

多分、スポーツ庁としては、そういうところの狙いもあるんだろうと思うが、文科省としては、あくまでも先ほど申し上げたとおり、学習指導要領の教育活動の一環という活動の位置づけなので、余りにも、一方的にやり過ぎると、地域や保護者の負担であるとか、地方自治体がそこについていけないというのもあるので、少し令和7年度までに改正されて8年度

からというところ、撤廃が、そこで起こってきたのかなと思うので、国がこう言っているが、いろんな日本全国の自治体のそういう環境のいろんな違いを見ていただければ、そう簡単にはいかないのだろうなというふうに思う。

金澤市長 雲仙ジュニアブラスというのは、平日も休日も全部これに移行しようってなると、やはり子どもたちから見たら、どうなのか。

中村学校教育課長 モデル事業の研究会を定期的に年に何回か行っている中で、今後雲仙ジュニアブラスに市内中学校の一本化をすることが可能なのかと。

実際、今127名の吹奏楽部の子どもたちがいる。

それに対して、UNZENジュニアブラスに加入している子は31名なのだ。

残り90名の子の活動をどう保障できるのか。

既存の中学校のブラスバンドと、UNZENジュニアブラスという地域バンドこれを、どう整理して一本化していくかという課題があるという状況だ。

富永教育次長 中村課長、スポーツ競技部の地域クラブ活動の中体連参加というのは、見直しはあるのか。

中村学校教育課長 県の中体連のほうから、各学校の方へ文書がもう届いていると思うのだが、県中総体に、通常であれば雲仙市代表ということで、中学校が参加をする。

その県大会の中に、クラブチーム枠というのをつくるというふうに聞いている。

その枠については、あまり大きくはないと思うので、例えば、県大会に出たいと手を挙げたクラブチームが5チームぐらい、もしあったとしたら、そこで予選をするのか、そこは全く分からないのだが、クラブチームも中総体の県大会や全国大会九州大会に参加をするというのは、もうこれはもうスタートしているというふうにお考えいただいて大丈夫だと思う。

仁禮委員 いろいろ考えたのは、総合型地域スポーツクラブというのを新たにつくってそこで選手の登録や保険とか集金とか、その辺を一括して、謝金とかも支払えるような、そういう団体をつくる必要があるのではないかと思った。

江川委員 先ほど基本的には賛成だというふうに言ったのだが、どこが中心になって、それを進めるのかという、そこも非常に難しい。そういう、母体をしっかり構築しないと、難しいのかなという感想を持った。

永岡委員 いろんな意見を聞いていたら、自分の意見も分からなくなってしまった。

それで、これから長い目で、本当に子どもたちの為に、1番良い事が考えられたらいいなと

思った。

下田教育長 江川委員が言われたとおり、どこがそれを進めていくかというところ、やはりここは教育委員会がしっかり関わっていくだろうし、今中学校の校長会もそれを進めてくれて連携しているが、またそれだけでも駄目なんだろう。

やっぱり今現在外部指導者として当たっている方たちも一緒に入っていて、先ほど言われたそういう団体の設立が可能かどうかとか、中心的役割を担っていただけるかどうかとか、そういうのを探っていく必要があるのかなと思っているので、非常に大きな課題だと思っている。

金澤市長 今、ほかの教育委員が言われたように、最終でどういう状況が発生しても、最終的に子どもたちのためにどうするのかという視点だけ外さないように、やっていくのが1番大事なことなんだろうというふうに思う。

もう、頑張ってくださいって言う。一緒に頑張ろう。

富永教育次長 本日の総合教育会議は地域移行という形で、皆様方に御意見をいただいた。市長からもあったが、子どもたちに対するあるべき姿を、我々教育委員会それから雲仙市、あわせて、どこが主体的に母体を担うのかというような事を、今後、教育委員会としても模索をしていきたいというふうに思う。

皆様方から貴重な意見をいただいた。来年度から3か年で協議を進めていくので、今後も皆さん方の御意見をいただきながら、より良い子どもたちのためになる制度、施策を推進していきたいというふうに思う。

他にないか。

これで、議事を終了する。

その他について、何かないか。

以上をもって、令和4年度第2回雲仙市総合教育会議を閉会する。

【11：32 閉会】